



作品をつくる中でできる端材は、アクセサリに



花の飾り方を考えなくても、一輪挿しだけで部屋を彩れる



FUKU GLASSWORKS
相馬佳織さん



夏場の作業中は温度計が50度を超えることも



店内には相馬さんの作品だけでなく、オールシーズン使える日用品や季節に合った商品展開も



つくって満足ではなく、 使いやすさを大切にしたい

気軽に普段使いできる作品を生み出す吹きガラス作家

普段使いを意識した作品が特徴的な、吹きガラス作家の相馬佳織さん。相馬さんは、家のインテリアになってしまいがちなハンドクラフト製品に対して、「手にとって日常的に使うことが大切」だと考えます。例えば、彼女の手がけたガラスは、スタッキングできる仕様。また、使うときにストレスにならないように軽さも意識されています。使いやすい食器には自然と手が伸び、より愛着がわきやすいもの。

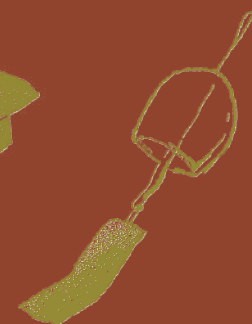
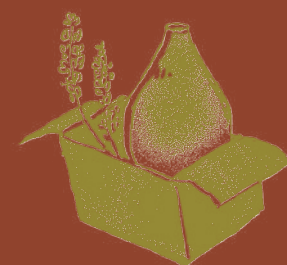
「最初は自分のつくりたいと思うものばかりを手がけていましたが、いざその食器を使ってみると収納しにくくて。次第にお客様の声もとり入れながら、使いやすさを大切にしたいつくりを心がけるようになったんです」

学生時代に、試行錯誤して形をつくる吹きガラスの楽しさに魅せられ、作家の道を目指すように。卒業

後は、東御市の「ガラス工房橙^{だいたい}」での勤務を経て独立し、拠点を長野市へ。その後、工房の移転を経て、2018年に日用雑貨とギフトの店「FUKU GLASSWORKS Tenpo」をオープン。店内には相馬さんの作品だけでなく、自身がセレクトしたテーブルウェアや雑貨も並びます。ギフトの要望に対しても、積極的に提案を行うという相馬さん。

「会話を通して、本当に使ってもらえる商品を伝えられたらと思っています」

商品を提案し、販売するだけでなく、ギフトを贈られた相手への配慮もきめ細やか。例えば、一輪挿しを購入いただいたら、開けてすぐに飾れるようにドライフラワーを一輪入れるのだとか。「手にとり、使ってほしい」という相馬さんの想いは、作品づくりに、店のスタンスにも一貫して表れています。



特集

モノとの向き合い方を考える
いま欲しいのは、“ストーリー”

暮らしを愛でる、 ハンドクラフト

Handcraft

大量生産・大量消費の時代を過ごしてきた私たち。

暮らしに必要なものって、安く手軽に買えるようになりました。

でも、そんな便利で豊かな暮らしのなかで、ふと立ち止まる。

モノを大切に扱う、手入れをして長く使うことが忘れがちになっていませんか？

「使い捨てればOK!」「また買い換えればいいか!」

だけど、本当にそれだけが正解？

もちろん大切なのは、暮らしとのバランス。

お金をかけてみる、時間をかけてみる、目を凝らしてみる。

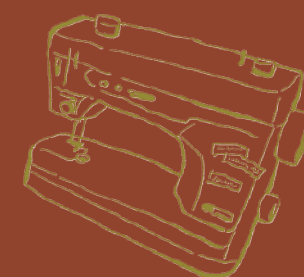
モノとの向き合い方を少し考えてみるだけで、よりよい暮らしに近づくかもしれません。

本特集では、長野で活躍する6名のつくり手、ハンドクラフト愛用者の活動をご紹介します。

彼女たちの活動や考えから、理想の暮らしのヒントを見つけてみて。

豊かであるって、どういこと？

さあ、「Biotope 的ハンドクラフト」考、はじまります!



R03

暮らしを愛でる、
ハンドクラフト

強度の高さと儚さを楽しむ 和紙を知って

「紙オタク」として楽しみ、伝えていく和紙作家



紙の記憶
荻原夏子さん



「植物から紙ができているっておもしろいじゃないですか!」と言うのは、和紙作家の荻原夏子さん。荻原さんのブランド「紙の記憶」では、和紙の原料であるコウゾの栽培から製造・加工まで行ったり、和紙づくりワークショップを行ったりと、日々の活動を通して和紙の魅力を伝えています。自身を「紙オタク」だと言



藍や柿渋で染めた和紙。手前はコウゾを乾燥、加工したもの。ここから繊維を取り出し和紙へと形を変える

う荻原さんの和紙との出会いは、大学時代にたまたま観たドキュメンタリー番組。岐阜県美濃市の和紙職人の技と、和紙の魅せる雰囲気心に心を奪われ、すぐに職人のもとへ。紙漉きのいろはを学び、現在は飯綱高原と飯山市を主な拠点とし、紙を漉く毎日を送っています。

飯山といえば、伝統工芸品として知られる「内山紙」の生産地。いわば厳しい職人の世界ともいえる業界の道に踏み入れた当初は、子育て中の荻原さんは閉鎖的な雰囲気壁を感じた場面があったのだそう。

「紙漉きは、かつて農家さんが冬の間の現金収入源として行っていた産業。和紙は伝統工芸と構えず、私は『半主婦、半職人』として、楽しみながら和紙と付き合おうと思ったんです」

「紙漉きのワークショップは、より和紙の魅力を感じてもらえますよ」と荻原さん。

「和紙は植物からできているので、その時々で状態が違うし、繊維の採れた場所や気候でも風合いが変わります。その変化をぜひ体感してほしいです」

繊維が複雑に絡み合うことで強度が生まれる和紙。一方で、荻原さんは「儚さが和紙の魅力」とも。

「和紙製品は、破れても和紙を重ねて補修して使えます。耐久性の高い素材よりもチャーミングだなと思うんです」

破れて終わりではなく、手直しして楽しむ。愛着度を高めるそのひとつ間も、和紙の醍醐味ではないでしょうか。



柿渋を施した和紙のトートバッグ。強度を高めるためにこんにゃくのりを染みこませた和紙を使用している



和紙の紙縫を釘にして下どめして製作する「和綴製本」など紙の様々な魅力を伝えている



「帽子は省スペースでつくれるのいい」と黒岩さん。ミシンや木型は帽子づくりに欠かせないアイテム



店内に並ぶ帽子を見ると「どんな帽子が似合うだろう」と思わずかぶってみたいくなるはず

R02

暮らしを愛でる、
ハンドクラフト

帽子をかぶると出会える 自然と笑顔になる瞬間

帽子のある生活を提案する帽子作家



atelier anielica
(アトリエ・アニエリカ)

黒岩裕美子さん



帽子だけでなく、ヘッドドレスやカチューシャ、コサージュの取り揃えも



赤と緑のカラーリングが目目を惹く外観

善光寺の表参道から一本横道へ。SHINKOJiニアスペース内に「アトリエ・アニエリカ」の黒岩裕美子さんのアトリエが現れます。なかには、日常使いできる柔らかな布地の帽子から、フォーマルシーンで映える上品な帽子まで並び、カウンターを挟み作業スペースを備えたミニマルなつくり。ヨーロッパの街角にあるようなかわいい雰囲気が溢れます。

「この帽子、似合いそうですね!」とお客様にすすめてみると、ぴたり似合うときがあつて。お客様も自然と笑顔になるんです。その瞬間がすごく嬉しいですね」

黒岩さんの帽子作家としてのキャリアは、23歳のときにカルチャースクールで出会った帽子づくりの講座から。その後、東京で帽子デザイナーに師事し、ロンドンへの留学も経験。県内のチャレンジショップでの出店を経て独立しました。

「私は人に帽子をかぶってもらうことが好きなのかもしれません。帽子をかぶることで、見た目の印象も気分もガラッと変化するんです。私のつくる帽子で、その楽しさを感じていただけたら」

ハンドメイドにかける思いをうかがうと、「やっぱり手づくりって、既製品とは違う部分があると思つていて。ひとつひとつの商品に、つくり手の心が入るんですよ」と黒岩さん。「実際に帽子を手にとつていただくことで、手づくりならではの精巧さや美しさを感じてもらえるはず」とも話します。一方で、ハンドメイドだからこそ手入りに気をつかい、購入に至らないケースも。最近では、帽子のクリーニングを手がける県内のクリーニング屋との連携も行う黒岩さん。帽子のある生活の楽しさを知っているからこそ、長く付き合う方法を提案し続けます。

R05 暮らしを愛でる、 ハンドクラフト

手をかけ、 日ごとに変わる表情を楽しむ

緑を添え、暮らしを愛でるガーデナー



石井志江さん



「ハンギングバスケットマスター」の資格を持つ石井さんは、異なる植物の寄せ植えの提案も行う



鉢だけでなく、フレームとの組み合わせで部屋を彩れる



庭だけでなく、部屋の随所に飾られたグリーン



庭とハンドクラフト。一見、つながりのないふたつに思えますが、「手をかけて『作品』庭をつくる」という意味では、庭づくりのプロであるガーデナーも、つくり手として暮らしを豊かにする立役者ではないでしょうか。

「庭の魅力は、変化すること。植物は毎日育ちますし、朝と夜でも違う表情を楽しめるんですよ」と話す石井志江さん。依頼があったお宅に赴き、庭づくりのお手伝いを行うガーデナーとして活動されています。その仕事内容は、お客さんの希望に沿って植物の植え替えやメンテ



「まずはお花屋さんに行つて、いいと思った花を選び、自分の気に入った素敵な鉢に植えてみることで。それだけで雰囲気が変わりますよ！」

自分の手で暮らしに緑を添えることは、日々を楽しむ小さなステップになることでしょう。

「自宅の庭のフェンスも、自分で手がけたものなんです。計測や設計からスタートして、完成するまでに半年ほど。子どもがいるのでペンキは身体に優しいものを選びました」

いきなり庭を整えるのは、少しハードルが高いかも。そんな人に向けて、植物を暮らしにとり入れるためのコツをお聞きました。すると、「鉢が大切なんです」と石井さん。

「まずはお花屋さんに行つて、いいと思った花を選び、自分の気に入った素敵な鉢に植えてみることで。それだけで雰囲気が変わりますよ！」



Tバックショーツは極力ゴムを使用しない設計。腰のゴム部分も肌当たりの優しいもの



ビーズや彫金など、パーツから手作り。オリジナルだからこそ、長く愛せる逸品になる



アクセサリーも手がける。大ぶりのモチーフはなかなか見かけないデザインものばかり

友人からの声かけで出店したイベントをきっかけに、ランジェリーの販売をスタート。SNSを通じて注文が来るように。

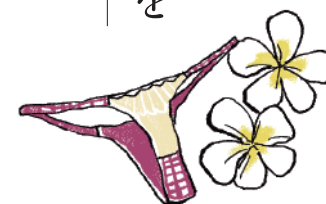
「Tバックを履かなくなった人も、履いた事がない人も『着心地がいい

なら履いてみようかな』とトライしてくださるのが嬉しいですね」

エステティシャンとしての経験も持ち、ランジェリーに対しても身体への負担を減らすことを考えるkalehiwaさん。既製品のなかには、補正下着など身体の引き締め効果を狙うランジェリーも多い一方で、彼女のつくるランジェリーは「ゆるめること」を重要視。「普段から鼠径部を締め付けにくい下着を身につけるのが理想。慣れるまでは、寝るときや休日に身体をリラックスさせるつもりで身につけてみてください」とkalehiwaさんは言います。「身体に密着するからこそ、ひとつひとつ丁寧に選ぶことで身体も喜ぶますし、既製品を選ぶときは素材や生産地を気にすることも大切だと感じます」とのアドバイスも。見えない部分だからこそ心がときめくものを選択することで、内側からキラキラと輝き、暮らしと身体とのコンディションが整うはずだ。



直接肌に触れるからこそ、自分が納得のいくものを。ランジェリー作家のkalehiwa（カレヒヴァ）さんは、そんな思いでランジェリーづくりをはじめました。



「ワンピースなどの洋服も手がけたいんです」とkalehiwaさん。アイデアは尽きず、常に新しい商品を考えている

R04 暮らしを愛でる、 ハンドクラフト



kalehiwa (カレヒヴァ) さん



気持ちと身体をゆるめるランジェリー作家

着心地のよさを大切に 心がワクワクするランジェリーを

「身体にストレスフリーな、『空気がみたいな下着』が欲しくて!!」

独学ではじめた洋裁のスキルを活かし手がけるランジェリーは、遊び心のある明るいカラーリングと着心地のよさが特徴。すべてオリジナルパターンから生み出されたワンアンドオンリーの作品です。アイランドスタイルやヒッピー、アンティーク、ナチュラルなどさまざまなジャンルをとりいれ、選ぶ生地はヴィンテージの雰囲気があるものが多いそう。

組紐は自身が身につける着物の帯締めとして利用している



R06 暮らしを愛でる、 ハンドクラフト

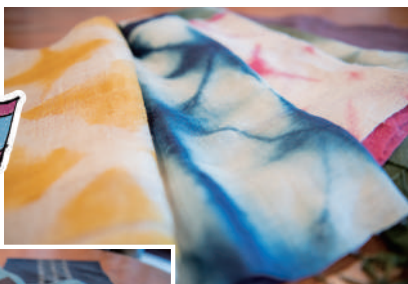
授業を通して 手しごとの魅力を伝える

織物に魅せられ、使い、つくる伝道師

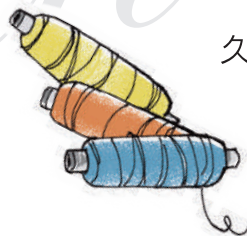


久保さよみさん

ラオスでは染色も体験。
フルーツや藍など、どれ
も自然由来の染料を使用
している



ラオスに足を運ぶたびに
織った伝統柄。「最初は
1cm織るのに1時間かかっ
たんです」と久保さんは
振り返る



「これまでに各国で伝わってきた技術や伝統が、現代に継承されていることに価値を感じます」と久保さんは織物への思いを話します。
20年前、海外旅行で訪れたラオスで民族衣装「シン」に惹かれ、現地の織物ワークショップに参加。その後、自分でも機織りをはじめました。手がけた作品の一部は自身のライフワークである茶道の衣装として身につけることもあるのだそう。「自分で織物を手がけるようになったからこそ、世界各国の手しごとでつくられた緻密な織物の高い技術力を再

認識しました」と振り返ります。
現在久保さんは、公立学校の教諭として働くなかで、授業を通して、手しごとの魅力を生徒に伝えていきます。

「多くの人に織物を知ってもらい、手しごとの価値が高まると嬉しい」

職員三人で授業を行うチームティーチングでは、チームの職員全員が手しごとに造詣が深く意気投合。組紐づくりや陶芸などつくる楽しさやものづくりへの興味関心を引き出すような授業を手がけてきました。ときに、生徒たちの前のめりな姿勢に驚かされることもあると言います。

手しごとの魅力に触れ、その価値を見いだし、伝える久保さん。『Biotope』読者に向けて「手しごとへの関わり方のいろは」を尋ねると「なにかしら自分の使うものをつくってみることをおすすめしたいです。もちろん買ってきたものの方が、見た目が揃っていてきれいですが、自分でつくった作品って大切にしたいかなんですよ」

小さなきっかけが、久保さんのように長く付き合えるライフワークにつながることも。興味のあるワークショップに参加してみてもいいなど、小さく手しごとと付き合いは始めるのもいいかもしれません。